直木賞作家 肩書にしない

書架探偵

衝撃的な作品で昨年、直木賞と山本周五郎賞をダブル受賞した佐藤究さん。圧倒的な知識と迫力の長編エンタメ作品を上梓し続ける、その原石ともいえる作品などについて語ってもらった。

文・竹縄昌／写真・森清

佐藤 究さん

ハードボイルド 新たな読者層に

―直木賞をとって1年です

「やっぱり忙しかったですね。一方で、これまで、そんなに人気もなかったのに、直木賞の影響で今回800冊にまとめてサインしたり、いつの間にこんなに頼まれるようになったんだ、と、ひとつとみたいな感じです」

―初の短編集もうれしいところです

「全部が『テスカトリポカ』（令和3年）以前の作品なんですよね。江戸川乱歩賞をとった直後の作品もあって、読者のみなさんにとっては新鮮かもしれませんが、作者としては、懐かしい仲間に再会した感じです。お前もいたか、みたいな」

―それぞれの作品への思いは

「『くぎ』は『テスカトリポカ』の様子見というかテストショットだったり、『猿人マクラ』は『Ａｎｋ：ａ ｍｉｒｒｏｒｉｎｇ ａｐｅ』のテストだったり、思い入れというか思いは、書いた時点でどういう評価になるかわからなかったから、懐かしさの方が強いですね」

―表題作の舞台が鹿児島県とは

「『Ａｎｋ―』の単行本が出た直後に小説現代からオーダーがあったんです。大きな仕事をした後は、ハワイやグアムみたいに暖かいところに旅行にいきたくなるんですが、そこにいつも仕事が入るので、〝俺の夏休みを返してくれ〟と南の方を舞台にしました。米軍も絡ませたかったので、距離的にも本土の鹿児島と海をまたいで沖縄と中間点で」

―洋上のシーンもあります

「そこはヘリコプターも出したくて、沖縄からの航続距離も考えました。軍用機好きにも応えたかった」

―科学史にも言及されています

「量子力学の議論は昔から好きで、ほんとうは『Ａｎｋ―』でもそのレベルでやりたかったのですが、理解力が追いつかなくて。小松左京先生ぐらいの力があれば、『爆発物処理班の遭遇したスピン』のレベルで『Ａｎｋ―』が書けたと思います。でも、それができないので、若いクリエーターが量子力学を使ってこの世はいかに特殊な設定でできているか、をテーマに、小説でもマンガでもいいからやってくれたら、僕自身が読者として楽しいです」

―長編ではご自身がゲシュタルトブックと名付ける分厚いネタ帳を作っていました

「短編でもおさいのは作っていますが、何も作らず書いたのは『くぎ』でした。実はこの『くぎ』が女性の読者の評判が良かった。だったら、『テスカトリポカ』も昔のハードボイルドと違って、新たな読者層に届くかなって思いました」

「〝ハードボイルドは50代以上の男性しか読まない〟というエンタメの固定観念を『テスカトリポカ』が打ち崩せた。ティーンも読んでいる。それ以前にそういう可能性があるな、と教えてくれたのが『くぎ』でした。やはり主人公のキャラクターの設定も大きいんでしょうね」

―この1冊で佐藤さんの世界観を知ることができる

「よく誤解されるんですが、作品イコール作者ではないです。編集側からのオーダーがあるんですよ。頭の中全部がこれだったら危ない。全体におろおろしい作品ばかりですが、頭の中がいつもそうなっているんじゃなくて、オーダーがあって書いてますから」

―今後は

「やっぱり、編集側からのオーダーをこなす作業がしばらく続くと思います。三島由紀夫をテーマに何かやったりだとか。今回、初の短編集を出してみて、ひとつずつ心温まる話を書けばいいのにって、自分でも思ったんですが、逆にその路線は求められていないことを、再認識しました」

―直木賞作家をブランドにしないとも

「そうですね。自分からは名乗りません。ツイッターにも直木賞の肩書はいれてませんし、その作戦はスタートしてます。世間的には、そういう見方は当分続くでしょうけど」

佐藤究（さとう・きわむ）作家。昭和52年、福岡県生まれ。45歳。平成16年『サージウスの死神』（佐藤憲胤名義）で群像新人文学賞（優秀作）を受賞して純文学系作品でデビュー。28年『QJKJQ』で江戸川乱歩賞受賞。30年『Ank：a mirroring ape』が大藪春彦賞と吉川英治文学新人賞を受賞。令和3年、山本周五郎賞と直木三十五賞を受賞。

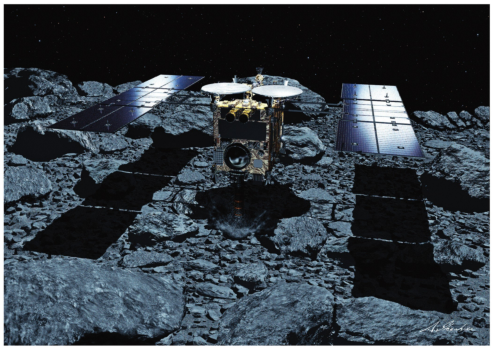
話題の本

初の短編集

爆発物処理班の遭遇したスピン

（講談社　1760円）

表題作の『爆発物処理班の遭遇したスピン』の舞台は鹿児島県。県警爆発物処理班が国際テロ組織の仕掛けた爆弾に翻弄され、がて国、沖縄の米軍も巻き込んだ爆弾事件に発展し、爆破予告には量子論に関する内容が含まれていた…。ほかに『くぎ』や純文学系の文芸誌に掲載された『ボイルド・オクトパス』など8編を所収。平成28年から令和元年までの怪作群である。



小惑星りゅうぐうと探査機はやぶさ2のイメージ図（池下章裕氏提供）

飛来小惑星が供給源か

地球の水はどこから来た

ＪＡＸＡ探査で検証進む

科学スコープ

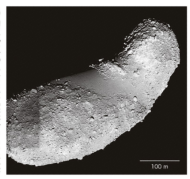
地球は「水の惑星」と呼ばれ、表面の約70％を海が覆っている。私たちの生命維持にも不可欠な水だが、実はどこから来たのかは未解明だ。水を含んだ小惑星が起源との仮説があり、近年、宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）などの小惑星探査を契機に検証が進み始めた。巨大な水素の固まりである太陽が重要な供給源として関わっているという分析もあり、今後の議論の行方が注目される。

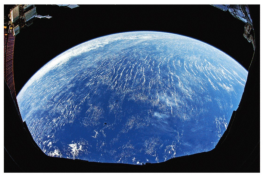
過酷環境 海を形成

地球の水の体積は約14億立方キロメートルで、ほぼ全てが海水。地球と似た構造の火星にも水はあるが、氷の形で地中に埋蔵されているとみられる。一方、太陽に近い水星や金星の地表は高温で乾き、液体の水は存在しないとされる。豊かな水は太陽系で地球だけの特徴だ。

地球は約46億年前に誕生した。当時は高温のマグマに覆われ、水を含む小惑星が次々と衝突する過酷な環境だった。水蒸気や水素として大気中に残った水は、マグマが冷えて固まった後に雨となって降り注ぎ、海を形成したと考えられている。

地球に落下した隕石からは水を含む鉱物が見つかっている。ただ、落下後に地球の物質が付着した可能性もあるため、水の起源を探るには始の姿をとどめる小惑星を調べる必要がある。そのミッションを担ったのがＪＡＸＡの探査機はやぶさ2。2014年12月、小惑星りゅうぐうに向けて打ち上げられた。





㊤初代はやぶさが探査した小惑星イトカワ（ＪＡＸＡ提供）
㊦国際宇宙ステーションから撮影した「水の惑星」地球（ＪＡＸＡ／ＮＡＳＡ提供）

「ゆりかご」のように

6年後の20年12月、はやぶさ2は採取した砂を地球に持ち帰った。その後の分析で、小惑星の元になった母天体がかつて太陽系の外縁部にあったことなど新事実が次々と明らかになった。

今年8月、海洋研究開発機構の伊藤元雄主任研究員らのチームは「小惑星の鉱物が『ゆりかご』のように水や有機物を守り、地球に届けた可能性がある」と発表した。試料の砂粒を分析したところ、水素と酸素が結び付いた水酸基という状態の水が、ケイ酸塩という鉱物に取り込まれるような形で存在していた。

さらに9月には、ＪＡＸＡや東北大のチームが試料から液体の炭酸水を検出したと発表した。

伊藤さんらは、りゅうぐうのような太陽系外縁部の母天体から生まれた小惑星が地球に飛来し、水の供給源となった可能性を指摘する。ただ、水に含まれる重さが異なる水素原子の比率が、試料と地球の水では一致しないことも判明。「他の供給源が関わっているのではないか」と伊藤さんは推測する。

太陽風の水素が反応

候補の一つが、太陽が放出する「太陽風」と呼ばれる高温ガス。太陽風にはイオンの状態の水素が含まれている。この水素が地球の近くにあった小惑星やちりと反応して水に変化した上で、地球にやって来た可能性があるという。

この仮説の構築に貢献したのが、ＪＡＸＡの初代はやぶさに続く小惑星イトカワの探査で、米アリゾナ州立大は、乾燥した岩石と見られていたイトカワの微粒子を分析し、実際には水が含まれていたことを突き止めた。しかも、その特徴は地球の水に近かった。

英グラスゴー大などのチームも21年1月の論文で、イトカワの試料から水が見つかったと報告した。太陽風の水素が、小惑星の鉱物に含まれる酸素と結び付いて水になったと結論付けた。この過程が、地球の水特徴を説明する手掛かりになるかも」と期待を示した。

産経新聞源流100年

産経新聞の源流、南大阪新聞の本格創刊から100年

前田久吉 メディアの革命児

松尾理也

■第5部 ③

浅野由三と大学開校

浅野由三（大阪電気通信大提供）

公職追放中も、前田久吉のもとにはさまざまな人々が訪れた。それが銀行や証券会社といった新聞以外の事業、前田の言を借りれば「地域の社会学」を手掛けることにつながっていくのだが、ひとつに大学運営がある。

『前田久吉伝』によると、昭和22年のことだった。大阪府守口市にある東亜電気通信工業学校の理事長が訪ねてきた。学校のことを頼むというのである。「電子工業はこれからの復興日本にせひ必要だし、学校だけはつぶしたくない」。前田は引き受けた。学園は、のちに現在の大阪電気通信大に発展する。

同校の始まりは、昭和15年4月に開かれた大阪無線学会主催の第1回無線通信士養成講習会にさかのぼる。大盛況だったこの講習会の熱気から学校設立の機運が盛り上がり、16年4月の東亜電気通信工学開校に結びついた。中心的な役割を果たしたのが浅野由三だった。

浅野は明治37年生まれ。無線電信講習所（現・国立電気通信大）を卒業した専門家で、昭和14年に大阪無線学会常任理事に就き、電気通信従事者の育成に情熱を燃やしていた。学校設立に向け、議論のため深夜まで一杯のコーヒーを前に阿倍野の喫茶店で粘り、ついには店から閉め出しをくらったこともあった。

だが、終戦後生徒数が激減。26年3月、前田の理事長就任とともに浅野は常務理事に就く。

天王寺師範付小を卒業後、前田は丁稚奉公に出た。「師にもつかず探り探り学ぶつらさは充分身に覚えがある」と前田は振り返っている。「学ぼうにも学べない若い人たちのため出来る事があったら何か道を拓きたいとは常に考えていた」

一方で浅野は「日本一の電子工業大学をつくる」という夢を抱き続けていた。関係者は、その夢を聞くのに「5時間以上、トイレも行かないで辛抱した」と回想している。それほどの熱弁だった。

前田が産経を離れてしばらくたった36年2月ごろの吉田禎男の回想録に、前田とともに「寝屋川へ行き、目下建築中の大阪電気通信学園（近く大学昇格）大学部校舎の下検分」「浅野氏と会見、来たる5月同校寝屋川大学部の新校舎落成式の打ち合わせ」との記述がある。希望に満ちた大学の開校は前田の心にも明るさをもたらすものだったのではないか。

前田は大阪電気通信大理事を46年まで務めたが、東京タワーはじめ他の経営に忙しかったのか、大学にはあまり姿を見せなかった。東京にいる前田への連絡も、常務理事だった浅野の役目だった。浅野は49年9月に亡くなる。

前田は「まさに氏は、この学園のために、この世に生を受けて現れたような人として、私の敬愛している人物の一人であります」との言葉を寄せている。

（敬称略）

（大阪芸術大学短期大学部教授）

月～金曜日掲載